

虫の親切、風の親切

札幌市医師会
札幌厚生病院

なかのわたりまさゆき
中野渡正行

緩和ケア内科で末期がんの患者さんを担当しております。患者さんとのコミュニケーションは患者さんから学ぶ耳学問の時間でもあり、患者さんの体調に注意しながらお話を伺っております。ある女性患者さんとの会話をご紹介します。患者さんは長年市民運動に携わってこられた方です。

◎今の気持ちは？：

「入院して気持ちが楽になった。今まで自分を支えてきた『つっぱり』がなくなった。今まで何か起こるたびにパニックになっていた。今後どうなるのだろうと不安になっていた。しかし今は他人事みたいに冷静になって自分を見つめている。なんでこんなにも意地を張って生きてきたのだろう。他の人がやってくれることは素直に聞こうと思う。気張る必要はない。自然のままでもいいと思う。すべてを穏やかに受け入れることができる。今、このまま死んでも自分は死んでいることがわからないかもしれない。それでもいい。天寿がんはwelcomeだ」

◎がんになったことについてどう思うか？：

「がんはありがたい。脳梗塞に比べて残された時間があるので多くの人たちとやりとりができた。皆さんが私のことを理解してくれた」

◎これまでの人生についての感想は？：

「本物を探し続けた一生だった。自分の人生に悔いない」

◎人生で一番いい時期は？：

「人にはいろいろな季節がある。小さな花を踏みつけて何も思わない季節もあれば、しゃがみこんでじっと見つめる季節もある。どれが一番いい季節と言えるものはない」

◎残された人生をどのように過ごしたいか？：

「残りの人生を消化試合にしたくない。もっとactiveにぶっ飛ぶように生きていきたい。いつも『素敵！』とか『不思議！』とかいうようなワクワクする言葉を使って生きていきたい」

◎命とは何か？：

「命はリレーだと考えるようになった。例えば花は営々とバトンを渡し続けている。人間も同じだ」

◎日本は自然災害が多い国で、それが少なければ国民はもう少し安心して暮らせると思うが、それについては？：

「果たしてそうだろうか。北欧のある国ではコンビニの数より図書館の数の方が多い。どんな貧しい

家でも個人の蔵書は500冊ある。それが何代も受け継がれていく。精神の受け継ぎ、精神的な安心感は大変。残念ながら日本にはそのような精神の受け継ぎは少ないと思う」

◎自分の心が開放されるのはどんな時？：

「それは『自然』の中にいる時。虫の音、風の音に耳を澄ます。虫の親切、風の親切に耳を傾ける。日本という緑の多い国に育ったことが安堵感につながっていることは確か」

◎子供に対する大人の役割は何か？：

「昔は『子供に良い環境を』と考えていた。しかしそれは大人の自分を中心に考えており、子供たちを抽象的に見ているにすぎない。本当に大切なことは自分が子供になった視点で物事を考えることだ」

◎患者さんの付き添いをする家族の心得は？：

「付き添っている家族は追い詰められた気持ちになるので、心の中で自分を休ませることが必要。ゆとりを持って笑っていることが大切。時には今自分がいる場所と違う場所に身を置いてみることは役立つ。主人の看病をしていた時、わずかな時間を作ってキタラのコンサートにタクシーで行ったことがある」

◎政治家にとって必要なことは何か？：

「吉田茂は言っている。『形は政治家だが、その前に哲学者であるべき。もしその人に哲学があれば、行き詰まった時でも思い切った行動がとれる』と」

◎痛みについてどう思うか？：

「耐え難い痛みは取ってほしい。しかしある程度の痛みは自分自身が感じていた方がいいと思う。生きていることの証でもあるから。気持ちいいことも痛いことも味わっていた方がいいと思う。『生まれている』ということはこういう感じなのだ」

◎医療者からの病状の質問についてどう思うか？：

「皆さんはいつも『痛みはどうか？』『吐き気はどうか？』と気にかけてくれてありがたい。しかし私のようにがんが進行している人間は多少の痛みや吐き気があっても当然。それよりも私は自分に残された時間が少なくなっており、その間少しでも太陽が昇る様子や日中の光の移ろいを窓際で見つめている方が大切だと思う。これからは『今、何を一番したいか？』と尋ねてほしい。今は、ベッドの向きを変えて外を見えるようにしてほしい」

患者さんは気骨のある人で大局的な視点を持っておられました。会話はテンポよく、回診は私が新しい発見や気づきを得る、非常に新鮮な時間でした。約100年前、柳宗悦は民衆の暮らしの中に「美」の世界を見つけて「民藝」という言葉を作りましたが、「美」に限らずしっかりと「知」を持って生きている人々が我々の回りにいることに驚かされます。私などは足元にも及ばないのです。